

氏名	宮本 一行
学位の種類	博士(美術)
学位授与番号	甲第1号
学位授与日	令和6年3月18日
論文等題目	和文 音環境と協奏する芸術実践：聴取のための複合芸術研究 英文 Playing with Soundscapes: Transdisciplinary Artistic Research for Auditory Experiences
審査委員	主査 秋田公立美術大学教授 岩井 成昭 副査 秋田公立美術大学准教授 石倉 敏明 副査 秋田公立美術大学准教授 唐澤 太輔 研究科長 秋田公立美術大学教授 岸 健太 外部審査員 嵯峨美術大学名誉教授 大森 正夫

(論文内容の要旨)

第一章では、宮本一行が行ってきた研究の背景と目的、意義等が述べられており、宮本における芸術実践の端緒となった研究のフィールドに対する問題意識が吐露されている。それは「あたかも観測者自身が不在であるかのようにサウンドスケープ研究が進められていることへの疑問」であり、そこから宮本が自身も音を発することに自覚的になることの重要性を説き、音環境における不可欠な存在として自身を位置づけ、能動的な聴取を試みる芸術実践につなげていくことである。

第二章では、未来派のルイジ・ルッソロから始まり、建築空間におけるヤニス・クセナキスの実践、ミュージック・コンクレート、ジョン・ケージにおけるチャンス・オペレーションと不確定性の音楽などを通して二十世紀以降の音環境に着目した芸術実践の流れを俯瞰する。その流れは、音響彫刻からサウンド・インスタレーション、サウンド・スケープ・デザインといった、近年に聴取という行為が拡張していく過程で形成されたジャンルにまで至る。しかし、この章で重要なのは、筆者によって提唱された、音の「成し手」が作り出す三種の芸術実践と、「聞き手」による四種の聴取体験の類型化であろう。これらの類型が先行する芸術実践を読み解く手がかりとして読者に提供されると同時に、音環境に対する宮本の芸術実践にも対応させている。

第三章は2018年から2021年にかけて宮本が取り組んだ四つの芸術実践が解説され、それぞれの実践の中で宮本が定義する聴取の立場である「成して」と「聞き手」として自身の実践がどのように作用しているのかを、主に身体の状態について述べることで解き明かそうとしている。

第四章についても第三章と同様、四つの芸術実践について、作者が環境音からどのような形で着想を得ていたのか、「環境を経験する身体感覚」と「環境に開かれた身体感覚」という状態を軸に明らかにしていく。また、音環境と協奏するための身体的な行為をクリストファー・スモールの「ミュージッキング」という概念と重ねて、音楽の行為的な側面がそれぞれの芸術実践の中でどのように関係づけられているのかを示した。そして、これまでの研究の集大成ともいえる博士課程修了作品であるサウンド・インスタレーション《雪面の歩行》の詳細を解説すると共に、私たちが経験する観測者でもあり行為者でもあるという態度の中に、従来の聴取体験を超えた身体的聴取と呼ぶべき新たな聴取体験が形成されるとしている。

第五章では、これまで記述された知見をまとめると共に、身体的聴取の経験を積むことにより、本来的な音環境を捉えることができ、それは第一章における「サウンドスケープのその後」という問いに対する回答となり得ることを示唆して結んでいる。

(作品審査の要旨)

宮本一行が制作した一連の作品（本人は芸術実践と表記）はある音環境の中で作者が調査やパフォーマンスを実施し、そこで作者自身が得た聴取体験の記録をサウンド・インスタレーションとして再構成するという特徴がある。そのインスタレーションとしての空間には、作者が別の場所で（あるいは別の時間に）音環境と対話した軌跡や所作、内的変化といった一人称的体験が制作行為を経て、実存する素材の選択、形状、数量、配置などによって変換されている。しかし、ここで重要なのはその一人称的体験とは宮本独自の視点である点だ。これはある音環境をテクノロジーによって普遍化し、バーチャルに追体験させるような類のインタラクティブなインスタレーションとは明らかに異なる点だが、これこそが宮本における研究の契機である「サウンドスケープ研究において、その場所に確かにいたはずの『観測者の気配』が感じられないことへの違和感」に対する優れた返答である。すなわち宮本のインスタレーションは作者自身の不在の身体を追体験するための空間なのである。しかし驚くべきことに、博士課程修了作品である《雪面の歩行》では、これらの特徴を有しながらも、鑑賞者に内在する豊かな聴取の可能性を引き出すための装置としても十分機能している。これは今回宮本が選択した雪面を歩く、というモチーフから発想された振動装置の導入が大きな効力を持つことにほかならない。さらに「聴取とは聴覚のみによらない」という前提に研究を進める宮本は、振動による触覚的な身体感覚に加え、絵画的フレームに転写した雪面歩行時に見えていた風景の導入により、音環境に眼差しを向けるという視覚的聴取にも言及している。これらの秀逸な点を総合的に評価し《雪面の歩行》が博士課程修了作品として成立していることが審査の過程において共有された。

(博士論文審査の要旨)

現代的な文脈上における宮本の実践意義を石倉副査は評価している。博士論文で対象となった宮本の活動は、近年の傾向として、地方芸術祭、或いは地域アートの氾濫するコンテンツから逃れて、脱中心的な第三の場所で実践されて来たことが、環境や場所性の認識に新しい視点を加えていること、またコロナ・パンデミックの只中では、マスクを着ける日常生活の中で内的な音を聞くことを誰もが経験しており、宮本が示す聴取体験の拡張を促す論展開に相応しい土壌が形成されていたことが有意義であるとした。一方で、論文内に頻出する「本来的」「対称性」といった語彙の使用に対して常に対義語である「非本来的」「非対称性」双方をとらえることが重要であるとし、主体である宮本の視点がどのように担保されているのか、そして学術的な概念に頼らず、アーティストの体験として自身の言葉で語ることが今後の課題であろうと指摘した。

唐澤副査からは主に二点の指摘が成された。第一には、作品《雪面の歩行》の鑑賞体験をミュージッキングと捉えるのならば、鑑賞者自身が生成している呼吸音や心拍音などの身体内部の音と作品との関係性は作者としてどのように捉えているのかという疑問である。そのうえで、鑑賞者の内的な音を意識させ、さらに作品との共鳴を起こすには今後さらなる工夫が必要であるとした。次に、論文を通底するテーゼとなっている「サウンドスケープその後」に対して自身の研究はどのような答えを導き出せたのかという問いである。これについて宮本は、近年サウンドスケープの概念も音環境から聴取する側に関心が移行していることから、自身の芸術実践を通してより以上に身体感覚を通して聴取する経験を増やしていくことが現状における回答であるとした。

大森外部審査員は、博士修了作品が優れていることを前提に、同作品が、四つの要素（「静止画を加工した 8 点の平面」「音響表現」「振動装置」「鑑賞者が関与することで生成される音環境」）から構成されていることを確認した。しかし論文上では、それぞれの構成要素について詳細な情報が明記されていないことを問題視した。同作品に不可欠な作品データとして、実際のインスタレーションで使用された構成部位それぞれの素材やサイズ、良好な状態で音響を再生し、装置を可動させるために必要な機材や機器を「再現可能な」条件のもと、もれなく記述する必要があり、この点においては客観性を欠いた不十分な論文であると指摘した。

岸研究科長は、論文タイトルに認められる「複合芸術研究」について、方法論としていかなるものであるのか

の説明が無いとし、本学研究科が掲げる「複合芸術」が未だ方法論の確立途上であることを自覚する難しさに言及した。

上記のように、作品と論文に対する幾つかの改善点と課題を残しながらも、自身の研究フィールドとしてのサウンドスケープや音響芸術の可能性と現状の課題を十分理解し、数々の実践を分析したうえで作品化する宮本一行の制作姿勢が、本博士課程の審査対象作品と論文に結実していることは疑いの余地はなく、博士号授与に値するとした。